

随 筆

歴史などいかがですか

小林 英敏

早いもので、医者として定年を迎えることになりました。藤田保健衛生大学では放射線腫瘍科を新設していただき、主任教授になりました。特許も実用新案もとりました。余技の数学での論文も日本語ですが発表しました。学会ではプログラム委員、教育委員としてお手盛りながら教育講演も座長もできました。愛知県がん診療専門家委員、がん拠点病院選出専門家委員に選出されて専門家会議にて諮問を受けて答申するというようなこともありました。なにより藤田では弟子たちに恵まれECR, ESTRO, ASTRO, RSNAなど海外の学会に教室として毎年発表しています。ここ数年は複数回の学会出張で資金のほう（なにせ弱小教室ですので）心配になるほどです。もともと、親の勧めで半分いやいやながらなつたとしては、まずまず順調な医者としての経歴かとおもいます。

小学校の卒業文集には歴史研究を志し、中学、高校の卒業文集には歴史に未練を残しながらも、しかたなしに医者を志す様子がうかがえます。話は今からちょうど50年前、東京オリンピックを直前に控えた昭和39年7月のことです。その頃私は中学2年生、横浜伊勢崎町にほど近い関東学院三春台中学校に通っていました。関東学院はバプテスト教会が設立した学校で、(人となれ奉仕せよ)を具現化することを学校全体の方針としていました。当時は大学に神学部があり、神の福音を伝える牧師の養成を担っていました。小学校は5年生のとき公立小学校から関東学院六浦小学校に編入転校したのです。バプテスト派の学校に転校したことにはそれなりの理由があるのですが、それはともかく小学校の下平校長先生が私の卒業に際し両親に「本人の希望が続くようであるなら、歴史の道に進むこともぜひ考えてやってほしい」と声をかけられたそうです。私には「神を恐れることは知識の始めである」との餞の言葉を添えた讚美歌をくださいました。インクで書かれた文字は少し滲んではいますが大切な宝物です。六浦に転校後は友達の話もあって毎週教会に通ってました。

「小林、今度の土曜日午後あいてないか」？

「べつに何も無いけど」。

「x x x こども園に労働奉仕に行ってみないか」。

私は学校が遠いこともあって奉仕活動には積極的に参加していませんでしたが、学校としては決して無理にはありませんが積極的に参加することを推奨していました。いくつかの施設とは密接なつながりがあり、特に x x x ことも園は毎週のように訪問しているとは聞いていました。

「なにをする」？

「新聞を折りたたんで、纏めて束ねるのが奉仕活動だけど早めに終わってソフトボールをして遊んでくるのさ」。

「小学校のときは毎日していたけど、しばらくしていないな」。

「大丈夫、こども園の子供達は知的障害があるので園の外には出にくいから一緒に遊ぶだけで遊ぶ」

と、行った日は天気もよく野外活動にはうってつけの日ではあったが、新聞を折りたたんで、纏めて束ねる奉仕活動をしながら、みんなのソフトボールでの歓声を聞いていたとき、どうということはないけれどもやはり何とはなしに私の居場所はここではないのではないかと感じていました。その上、障害者とは何とはなしに（知的障害者に限らず）意思疎通がうまくいかない。そもそも他人との意思疎通がどちらかといえば不得意。その日以後何回か誘われたが丁重にお断りした。

ちょうどその頃、家の近所に神奈川大学の文学部講師のK先生（哲学専攻、スピノザが専門らしい）が住んで見えました。先生の奥様が家で塾をひらいていて妹が通っていました。先生自身は塾で教えることはなかったのですが、何を思われたのか近所の中高校生を何人か英語を見てあげようということで選抜された中に私が入っていました。高校生とは一緒に見てもらったわけではないのですが、べつに英語が得意なわけでも成績がいいわけでもない私は当然まったくついていけません。

「君は努力しないね」。ということで破門されるどころでしたがK先生は文学博士号を獲得し、東京教育大学（現 筑波大学）の教官となって引越しされていきました。引越し前に両親にとんでもないことを助言して去っていきました。

「英敏君はやらせればできる。医者にさせるのがいいでしょう。そのためには湘南高校に入らせたほうがいい」。

ここで当時の神奈川県の高校事情について説明しておきます。進学校の県一番は栄光学園。6年一貫教育私学、戦前の陸士海兵を思わせる制服は憧れの的でした。1学年200人余り、うち東大に50人が入学する超一流校です。小学校の同級生が3人ほど入っています。どちらかといえば文系の強い学校です。公立高校は一学区に5校程度が所属し、学区内の中学生はどの学校も受験できる中

学区制です。ただし定員の1割は学区外からの入学も可能で県外でもOK。高校受験は内申書基本ゼロ査定。中学3年1月に中学校長会が行うアチーブメントテスト9教科450点満点と県高校教育委員会が行う高校入試9教科370点満点の1:1評価で合否判定する。実際はアチーブテストで足切りを行うので落ちる人はほとんどいない。ということはアチーブテストが本試験のようなものです。注意してほしいのは英語も国語も数学も50点、技術家庭も音楽、美術も50点。私立である関東学院は音楽、美術は実技のみなので知識はほぼゼロ。湘南高校は昭和初めに開校した県立高校としては比較的新参者ですが、栄光学園を除く進学校として県内1位を保持していた進学校でした（今は違いますが）。どちらかといえば理系の強い高校です。

両親はK先生の助言を聞いて突然、私に医者はどうなにかを力説し始めます。そもそも理系の教科はあまり好きではない小林君は聞きません。とうとう両親は脅しにかかります。

「親の義務は中学までなので高校などは行かなくていい。中学も関東学院のような私立に行かせる必要はない、中退して公立中学に転校させる。それでもいいことを聞かないようなら少年院に入れる。医学部に入って歴史の勉強をすることは止めない」。

小林君はびっくりします。まさか少年院はないとしても転校ぐらいはやりかねない、事実3月に関東学院を中退し、御成（おなり）中学に転校します。どうしても医者になりたくはないというほどの強い意志はなかったけれども、一生をかけたいと思っていた歴史を諦めることはつらい。中学二年の夏休みから秋まで毎日、必死に神に祈った。

「歴史の研究を通して、あなたの福音を世界の人に伝える仕事をさせてください」。

ちょうど東京オリンピックが始まった頃、神からの啓示を受けました（ように思っています）。

『君はいらない』。

それ以降、教会へは行っていません。中学の2年の秋から受験勉強が始まります。関東学院を退学し御成中学から湘南高校そして名古屋大学へ、そして医者となりついに定年を迎えようとしています。神は私に何をさせたいのか、ときどき悩みます。ご存知ないと思いますが日々の祈りという小冊子があります。365日と祝祭日の祈りが書かれた冊子です。久しぶりに読んでみて子供の頃、一生を懸けたいとまで思った歴史を探求するために必死に神に祈った頃の思いが帰ってくる気がしました。

歴史のどこにそんなに惹かれるのか、私にもわかりません。とにかく好きなのですが、大学に入った頃（勿論、医学部です）一応テーマを決めました。権力構造とその基礎構造というものです。簡単にいえば権力とは何を基礎にして成立して、どのように委譲していくのか。秀吉から秀頼には権力が移らないのになぜ家康から秀忠には権力が委譲されるのかというようなことです。同様に傀儡政権も権力構造上不思議です。皇帝は絶対権力者なのですが、後漢の献帝は権力がないのに献帝から任命された魏王の曹操、曹比はなぜ権力があるのかといったことです。内閣総理大臣や大統領は主権者である国民の支持を得ているので権力があり、選挙で負けると権力を失う。当然のことが起こらない国では権力構造はどう構築されているのか？あいつが悪いからだとかみんながだまされているからだではアジ演説にはなりますが学問にはならない。論理的明快さが必要です。しかし医学の研究は確認された（事実）を基礎にして論理的に構築していきますが、文系である歴史には（事実）というものが捕まえにくく、これを採る、採らないになってしまいます。すなわち、歴史書に記載されていることは記載されているということは（事実）ではあるが、記載されている事項が事実ではないかもしれない。ある人が言ったこと（記載事項もこれに含まれるわけですが）ではなくて、自分が採用した起こった事項を繋ぎ合わせ、それら事項を一連のものとして起こさせている何かを（了解可能なこと）として再構築することが歴史というものだと私は考えていますが。古事記に書かれていることは全部神話だと捨ててしまえば何も残りません。ということは採用できる事実を一つ一つ捕まえる努力が大切です。藤田の近くに桶狭間というところがあり、ある夏その辺の近くかそこかよくわからないけれども信長と義元が戦争し、義元が殺されたたということは事実です。義元が1万5千の兵を率いて京に上洛するのを信長3千の兵で奇襲攻撃をもって迎え撃ち云々。義元（駿河遠州100万石）、と信長（尾張80万石）の領国支配の力関係が五分の一ということはなく、兵力にそんなに差があるはずはありません。信長は尾張一国統一を成し遂げたところで親の代に互角であった力関係は信長に傾いていたはずで、その上夏に上洛するはずがない、食べ物腐るし労働人口を集合して農繁期に行軍？その年は不作間違いなし。1万5千の兵の食料は一日米75石（概ね150表）、どうやって運ぶの？トイレは竈は？桶狭間の戦いが書物に初出したのはいつ？戦いの後信長や周囲の人たちはどのように語っているのか？このように細かく検証していくのが歴史というものと考えます。

権力構造の探求には権力が揺らいでいる時代を選んで検討する必要があります。日本でいえば鎌倉から南北朝を超えて戦国時代のころ。中国でいえば魏晋

から南北朝時代（劉宋と北魏）、どちらも古代的土地の一元支配から中世的支配へと移行する時期になります。私は中国の魏晉南北朝を選択しました。当時の人が何を考え、何をしていたのかわからなければなんともなりません。言葉の勉強が必須です。当時の話し言葉はよくわかっていません。文献はひとまず、読んでおかなければお話にもなんにもなりません。もちろん原文以外は（どれが原文かも難しいのですが）研究対象ではなくお楽しみ読書です。原文は古典語で書かれていますので漢文が必要です。現代人が古事記を読めないように現代中国語では古典は読めません。中国文化は元の時代（日本の鎌倉時代から南北朝期）に大きな変化をしています。たとえば、現代中国人は食事は基本的に火を通したもののしか食べませんが孔子のころは（紀元前 500 年ごろ）生ものを食べたらしい。無意識のうちに前提を立てて理解することは危険なのですが、これを排除することは簡単ではありません。とにかく漢文で後漢書、三国志から南朝陳史までを読む必要があります。漢文の勉強もテキストが少なく大変です。高校の教科書を終了すると明治書院の漢文大系（1960）ぐらいしかなくほぼ絶版です。図書館で借りて書き写しては罫が明きませんので、古本屋をあさってます。この前、神田古本祭りにも言ってみましたが後漢書揃いで 30 万円ぐらい、古本屋に注文するとかなり高いことになります。私の人生の定年までそんなには長くないと思いますが、劉宋時代の（5 世紀：倭の五王が有名）土地私有と戸籍（土断法）をテーマとした論文を上梓したいものと思っています。上梓されましたらご一読のほどお願いいたします。

（藤田保健衛生大学医学部 放射線腫瘍科教授）